

樗流俳句選抄（冬季雑詠）

選者 今津大天 先生

佳作

小春日に杖も軽やか田舎道	天野桂花
祢宜が掃く広き境内神無月	亀山則天
奥飛驒の露天に浸かり雪見酒	亀山文月
珍しや五島列島雪景色	岩田紀正
卯建立つ蔵まで二間花八手	怨風庵華泉
爺自慢夕餉の膳に根深汁	野田春香
北風に背を丸うして寺参り	服部利水
長野発新幹線に今朝の雪	井戸幸女
過疎すすむ里の静寂紙を漉く	額綱久峰
夜仕事の苦勞の手皴優し母	二村秀香
初句会澄まし顔して筆を持つ	河合都
フンスに一花絡む冬薔薇	岩間芳泉
直立を保ち続ける枯芒	波多野寿扇
初雪を喜ぶ子等のほし赤い	波多野妙生
冬座敷写真の夫のこの笑顔	杉山多美
ひと鍬に力漲る老いの冬	村瀬昇竜
黙々とお庫裏さ一人落葉掃く	御田村光女
乗り遅れ次のバスまで日向ぼこ	大久保大凹
畑仕事主婦があわてる初時雨	丹羽三七九
コロナ禍で窓開け放つ冬座敷	熊谷詠月
通学の子等霜柱わざと踏む	兼氏翠月
一人住む老婆を守る雪囲い	山下宮裏

〈地位〉

大根干す昨日も今日も曇り空 畑佐楽人

〈評〉折角大根を干したが、毎日曇り続きとばかりである。しかし、確かに「干す」と「曇り」が対立関係にあるが、「雨」ではなく「曇り」というところから、世の中そんなに悪いことばかりではない。何ごともお天気任せでやうて行くと、という気楽さも感じ取れる句である。

〈天位〉

引ひ越しの年にたわわの庭蜜柑谷藤尚花

〈評〉今までそんなにたくさん蜜柑が生じた、はなかりだが、どういふ訳か引ひ越しを決意し、年になりて豊作になりたという皮肉な内容の句がある。でも、考えようによしては蜜柑が引ひ越していかないと呼びかけているとも解釈出来る。興味深い句と言える。

餅搗きにエブロン付けて二十歳の
庭先で小踊りをする寒雀
妻偲び内佛飾る大晦日

七 客

老一人寒夜はバブの湯に浸る
山寺の侘び寂び醸す冬紅葉
托鉢の僧に降り来る細雪
電飾の路電華やか十二月
柚子の湯に暫し綻ぶ父の顔
極月の水に手を入れ豆腐売り
窓を打つ吹雪に暫し筆止める

三 光

〈人位〉

着払ひの小銭を捜す師走かな
〈評〉この忙しい師走に着払いの、
てはならないというところが俳句の
ただ、「着払い」は「代引き」のよ
んだものか、他の人が着払いで荷物
かで少々異なる。この句の感じでは
であるが、大慌てで小銭を探した、
ない。

選者吟

小春風鴉も我も哲学者

樗流俳句次号応募要領

- 一、春季雑詠（ひとり三句）
- 一、締切り令和四年一月末日厳守
- 一、用紙 郵便ハガキ（句料無料）
- 一、所属社名、雅号名記
- 一、樗流会員変名不可
- 一、投句所 〒504-0934
- 一、各務原市大野町一丁目一二〇番
- 一、岩田華泉宛
- 一、電〇五八・三八二・七七二五

柴田小舟
国枝紫陽
寺田登仙

柴田文花
龜山秀月
龜山優花
早津郁男
青木凡舟
多和田瑠璃
後藤松月

永繩一紅
小錢を採さ
としては面
ように自分
物を送って
は、後者の
ことには変

大天

樗流俳句選抄本（春季雑詠）

梅村 五月

佳作

しみじみと孫の入試で知る速さ 高橋照笑
 静けさやみなうたた寝の置炬燵 御田村光女
 伊那街道車窓にバミと桃の花 畑佐楽人
 愛くるし孫と雛壇祝い酒 二村秀香
 蓮華田を車で廻りて木曾の旅 河村花玉
 酒仕込み終へ古里へ杜氏帰る 服部利水
 露味噌の香り仄かに里の味 井戸幸女
 懐かしや肩車寄せ会ひた桜道 山内澄香
 久し振り地下足袋履いて畑を打 柴田小舟
 地桜の開花を告げる紙面満つ 後藤松月
 散歩道はや蒲公英を見つけたり 長尾伎与子
 参道の花を楽しみ宴の輪 国枝紫陽
 ひとせの辿るは早し初つばめ 永縄一紅
 爛漫の春は津軽の海を越す 青木凡舟
 春光や老いに喜び運びくる 波多野妙生
 お花見の家族が群れる長良川 寺田登仙
 髪切りて春風まとふバスの旅 兼氏佐代子

〈地位〉

パンジーにスマホを向ける古い 岩田華泉
 〈評〉 本年は温かいのでパンジーがいじせいに咲き揃った。
 老人の皆さんもスマホを駆使されるようになした。
 歓声を挙げているのは、「老いの群れ」と断定された点が景となりつつたわじてくる。
 〈天位〉
 わらび狩り携帯電話で話をり 林 巴城
 〈評〉 便利な世の中になした。
 わらび狩りに携帯電話を使い教え合っているのだ。
 「おーい、そちは沢山採れるか」「あんな、白い岩があるあたりにいっぱい生えているのでこちらへ来いよ」と位置を知らせ合っているのだ。
 わらび狩りをするのに携帯電話を使用した例をはじめて知した。
 山盛りになりたわらびの束を見せ合っている光景が浮かんでくる。

振りあげし筍産毛の光けり 岩間芳子
 山裾に田園風景雉の声 畑佐俊作
 散歩道イヌフグリ咲き杖遊ぶ 柴田文花

七客

花吹雪格子戸すかし紙帳場 額久峰
 春うらら東坡の句碑の細き文字 加藤晴月
 合羽着て受粉作業の梨畑 村瀬昇竜
 人口の雪のゲレンデ客疎ら 畑佐美泉
 錆鎌を研ぐ小流れの温みけり 吉田亀笑
 墨太きうぐひす餅と菓子処 早津郁夫
 ちぐはぐな難聴会話山笑ふ 波多野寿扇

三光

〈地位〉
 席変えてホームの夕餉二月尽 藤井 修

〈評〉 追記に依れば一昨年妻を亡くされ娘さんの住んでおられる瀬戸市のホームに入所されていると、ホームでの席替えがあつて楽しい夕餉が訪れたのだ。
 席を替えたことと時の過ぎてゆく早さがつたわじてくる。

選者詠

兄よりも弟が勢ふ追儼かな 五月

注意事項

樗流俳句も良吟がつぎつぎと投句されて来て歓びにたえない。
 投句の中には「あ、この句どこかで拝見したぞ」とか「類句に近いな」と言じた句がありました。
 生活の中に生まれたあくまでも自作の句を投句して下さい。

樗流俳句次号応募要領

一、夏季雑詠（ひとり三句）

一、×切

一、用紙 郵便ハガキ（句料無料）

一、所属社名、雅号名記

（樗流会員変名不可）

一、投句所 〒504-0934

各務原市大野町1-120

岩田数美

電（058）242-2254番